

尋常小学国語読本における「人物教材」の教材観

——修身科・国史科との比較を通して——

足立 幸子

1. はじめに

国語教科書史研究は国語科教育史研究の中で国語科の教育内容や教材を明らかにすることに貢献してきた。同時代・異時代の国語教科書の比較的研究^①は行われてきたが、他教科の教科書との比較を試みた先行研究は少ない。国語科の教材の性質を検討するには他教科との比較が有効であると考えられる。

本稿では、他教科との比較を通して、国定期の国語教科書教材観を考察することを目的とする。

2. 対象と方法

本稿で扱うのは、第三期国定教科書に描かれた国語科、修身科、国史科に登場する人物の伝記的教材（本稿では「人物教材」と呼ぶことにする）である。時期によって各教科書の編纂意図が異なるため、時期を第三期に限定することにした。第三期にしたのは、比較的長期にわたって使用されていること、各教科とも人物主義に対する一応の形が確立した時期にあたることによる。人物主義とは教科内容を教えるのに人物を通して教えるという考え方である。修身科では徳目主義と人物主義の考え方の折衷がとられている。つまり、徳目を直接教える徳目主義は教えた徳目を明確に教えることができるが、教訓的になってしまって児童の関心を引きにくい。人物主義は、その人物の魅力で関心を持たせることができるが、教えるべき徳目を順序よくバランスよく配当することが難しい。そこで、題目には徳目を掲げるけれども、その徳目にふさわしい行いをした人物を通して、道徳的精神を養うという形になった。国史科では、歴史的事実を中心に教える事蹟主義と、歴史的人物に着目する人物主義の対立があったが、第三期以降は人物主義で落ち着いている。このように第三期では、国語科、修身科、国史科に共通して人物を通して教育することが行われているため、国語科の教材観の一端を浮き彫りにするのに適切であると考えられる。

唐沢^②によると第三期国定国語教科書、同修身教科書に現れる人物は11人である。国史教科書とともに表1に示す。なお、コロンブスと松平信綱については、国史教科書上の記述はない。資料1に一部の教材の要約と、資料2に一部の教材文の引用を示す。

人物の業績やエピソードなどの文章の内容（「話題」）と、「叙述」の仕方や「文体」といった文章の形式の2つの観点から比較する。その際、教科書の記述自体がどう違うかという「教材レベル」と、教育雑誌などからみる教材観や指導観がどう違うかという「教材観レベル」の2つのレベルに分けて検討を進め、当時の国語科の教材観について考察することにする。

表1：「人物教材」一覧

人名五十音順

人物	国語	修身	国史
①勝安芳	12巻26課 勝安芳と西郷隆盛	5巻14課 勉学 5巻15課 勇気	下巻50課 武家政治の終
②加藤清正	7巻23課 加藤清正	5巻22課 信義 5巻23課 誠実	下巻35課 豊臣秀吉（つゞき）
③楠木正成	6巻23課 千早城	5巻2課 忠義 6巻6課 忠孝	上巻23課 楠木正成
④コロンブス	8巻19課 コロンブスの卵	5巻16課 忍耐	
⑤神武天皇	5巻5課 金鶏勲章	3巻16課 祝日 5巻1課 我が国	上巻2課 神武天皇
⑥豊臣秀吉	7巻18課 木下藤吉郎	4巻4課 志を立てよ 4巻5課 皇室を尊べ	下巻34課 豊臣秀吉 下巻35課 豊臣秀吉（つゞき）
⑦乃木希典	8巻28課 乃木大将の幼年時代 9巻10課 水師營の会見	6巻15課 清廉	下巻6課 明治三十七八年戦役
⑧広瀬中佐	8巻24課 広瀬中佐	2巻16課 チユウギ 2巻17課 ヤクソクヲマモレ	下巻6課 明治三十七八年戦役
⑨松平信綱	8巻4課 武将の幼時	2巻14課 シヤウヂキ	
⑩明治天皇	4巻3課 十月三十一日 12巻1課 明治天皇御製	3巻16課 祝日 4巻1課 明治天皇 6巻2課 国運の発展	下巻51課 明治天皇 下巻8課 天皇の崩御
⑪本居宣長	11巻17課 松坂の一夜	3巻6課 せいとん	下巻45課 本居宣長

資料1：教材文要約（③楠木正成，⑦乃木希典，⑨松平信綱）

③楠木正成

国語 6巻23課 千早城

正成が千早城を守った時、敵が百万騎、味方はわずか千人ばかりであった。しかし、正成は次のような方法でこれを打ち破った。

城のやぐらから大きな石を落として、五六千人の敵を殺した。水攻めになりそうになったが、十分な水を用意しておき、敵が油断しているところを旗を奪って逃げた。悪口を言って敵をおびき寄せ、大木を落として五千人を殺した。藁人形で敵を欺いた。敵ははしごを作り橋の代わりにして攻め込んできたが、正成は松明を橋の上に投げさせたため、橋は燃えてしまい、何千人かが死傷した。

このようにして、千早城は陥落しなかった。「正成は実にえらい人である。」と結ばれている。

修身 5巻2課 忠義

謀反を起こした北条高時を討つと後醍醐天皇が正成に命じる場面と、正成が高時を討ったという報告の場面が中心になっているエピソードである。

高時を討ったところよりも、後醍醐天皇に命じられてそれに応じる場面—正成が「どんなことがあっても

自分が生きている限り、聖運が開ける（天皇にとって運が開ける）ようにいたしましょう」という意味の受け答えをすところ一が強調されている。高時を討った事実より後醍醐天皇に尽くした忠義の方が重要であり、忠義ということに焦点化するように書かれている。

また、討った後、天皇が正成を呼んでその忠義を褒めた時、「強敵を破ることができましたのは、全く陛下の御徳によることと存じます。」と答えた場面を載せている。わざわざ鍵括弧を用いてこの言葉を強調している。

修身 6巻6課 忠孝

楠木正成が足利尊氏に討たれそうになった時、子の正行に向かって「父が討死した後は、お前は父の志をついで、きつと君に忠義を尽し奉れ。それが第一の孝行である。」と言う。

11歳の正行は父・正成が討ち死にしたと聞き、悲しさのあまり自殺しようとする。母は「そのやうなことで、どうして父上の志をついで、忠義を尽すことが出来ますか。」と諫める。そして正行は立派な忠臣になる。

正成が正行に伝えた言葉は、本来は、たとえ自分が死んでも自分の一族が生き残っているうちは尊氏を討てという文脈で言われているものであるが、修身の教科書ではこのような文脈を表す言葉は省略されている。

「格言 忠臣ハ孝行ノ門ニ出ヅ。」ということばで締めくくられている。

国史 上巻23課 楠木正成

足利尊氏が將軍になろうという野心をいだいている。

護良親王がその野心に気いたが逆に尊氏に殺されてしまう。

尊氏は東国を治めようとして朝廷の許しを得ずに謀反をおこす。後醍醐天皇が善良親王、北畠顕家、正成、義貞らと力を合わせて、尊氏ら賊軍をうち破る。

尊氏は九州で勢いを取り戻し、大軍を率いて京都に向かう。天皇は正成の助けを求める。正成は一旦敵を避け、勢いが衰えたところを一挙に滅ぼす計画を立てたが、用いられなかった。退散し桜井の駅で、天皇から賜った菊水の刀を形見として子の正行に授ける。自分が死んだ後も、天皇への忠節を全うするように言う。正成はよく戦ったが、やがて湊川で戦死、正行は弟の正季と刺し違える。

⑦乃木希典

国語 8巻28課 乃木大将の幼年時代

乃木大将は幼少の時体が弱く臆病で泣いてばかりいたので、無人（幼名）ではなく泣人だと言われた。父は子供の体を丈夫にし、気を強くしなければならぬと思った。四十七士の話を聞かせ、往復4キロもかかる泉岳寺へ連れて行った。また冬に思わず「寒い」と言ってしまった無人に「寒いなら、暖くなるやうにしてやる。」と冷水をあびせかけた。母も無人の嫌いな物ばかりを食べさせ、好き嫌いがないようにさせた。10歳の時、郷里へ帰る際、父母は無人を自分たちと共に歩かせた。郷里の家は小さい粗末な家であったが、「武士の魂」である刀・槍・長刀は、手入れが行き届いていた。

乃木が「武人の手本と仰がれるやうになったのは、まことにいはれのあることである。」と結ばれている。

国語 9巻10課 水師營の会見

明治38年1月5日午前11時、乃木大将がロシア軍を旅順を明け渡させた時の、ステッセル將軍との会見の

模様を示したものである。韻文で唱歌にもなっている。全文引用する。

旅順開城約成りて、敵の將軍ステッセル乃木大将と会見の所はいづこ、水師營。」
庭に一本なつめの木、彈丸あともいちじるく、くづれ残れる民屋に、いまぞ相見る二將軍。」
乃木大将はおごそかに、御めぐみ深き大君の大みことのりつたふれば、彼かしこみて謝しまつる。」
昨日の敵は今日の友、語る言葉もうちとけて、我はたゝへつ、彼の防備。彼はたゝへつ、我が武勇。」
かたち正していひ出でぬ、『此の方面の戦闘に二子をうしなひ給ひつる閣下の心如何にぞ。』と。」
『二人の我が子それぞれに、死所を得たるを喜び。これぞ武門の面目。』と、大将答力あり。」
両将昼食共にして、なほもつきせぬ物語。『我に愛する良馬あり。今日の記念に献ずべし。』
『厚意謝するに余りあり。軍のおきてにしたがひて、他日我が手に受領せば、長くいたはり養はん。』
『さらば』と、握手ねんごろに、別れて行くや右左。砲音たえし砲台にひらめき立てり、日の御旗。」

修身 6巻15課 清廉

乃木希典が清廉と思われる事柄4つが挙げられている。
巻紙がなくなった時、参謀長にもらって、軍用の郵便紙には手をつけなかった。
凱旋祝いにある人が槍をおくったが、受け取らなかった。
この人は受け取らなかったことに感心し、学生教育のための資料にと元寇の絵を送ったら受け取った。
宮中からの御下賜金をおしのかげにかえ、学習院の職員に分け与えた。
4つの事柄は共に乃木の清廉な人柄が現れているという以外、それぞれの繋がりがうすい。

国史 下巻6課 明治三十七八年戦役

乃木希典に関する部分だけを引用する。
「又陸軍大将乃木希典は、陸軍を率ゐて旅順にせまり、海軍と力を合はせて、其の要塞を攻撃せり。旅順の要塞は、敵が難攻不落を以て世界にはこりし堅城なる上、敵将ステッセル固く守りしかば、容易に陥るゝこと能はず。されど我が忠勇なる将卒は、一死以て君恩にむくいんとし、幾度となく突撃を行ひて、やうやく二百三高地を占領し、港内にかくれたる軍艦を悉くうち沈め、他の砲台をもつゞいて占領せしかば、ステッセル力つきて、翌三十八年一月、城を開きて降を請ふ。天皇はステッセルが其の国の為に尽せし忠節を嘉して、武士の面目を保たしむべき御旨を伝へたまひ、城中の将校には、特に帯剣を許して、本国に帰ることを得てせしめたり。」

⑨松平信綱

国語 8巻4課 武将の幼時

この教材は徳川家康の幼時の話が2つ「一 石合戦」「二 十四歳の時が二度あるか」と、家光の幼時の話1つ「三 雀の子」から構成されている。松平信綱は徳川家光に幼少の頃から仕えた人物であり、この教材の中で信綱が登場する「三 雀の子」に限って概要を示す。

長四郎（信綱の幼名）が11歳の時、竹千代（家光）が長四郎に軒端の巢から雀の子を捕ってくるように命じた。日が暮れて長四郎が捕りにいったところ、將軍秀忠に見つかってしまった。將軍は誰に命じられたのかを聞いたしたが、どんなにつらい目に合わされても、長四郎は口を割らなかつた。秀忠は「長四郎があ

の心で大きくなつたら、竹千代には無二の忠臣であらう。」と喜んだ。

修身 2巻14課 シヤウヂキ

信綱は子供の頃、將軍（秀忠）の屋敷で朋輩と戯れて、將軍が大切にしていた屏風を破ってしまった。將軍に誰が破ったのかと問われて、信綱は私がやりましたと正直に答えて詫びた。將軍はよく正直に申したと行って咎めなかった。最後は「シヤウヂキ ハ イツシヤウ ノ タカラ」という言葉で締めくくっている。

資料2：教材文（②加藤清正）

②加藤清正

国語 7巻23課 加藤清正

豊臣秀吉が朝鮮へ向かはせた先手の大将は加藤清正・小西行長の兩人でした。行長は清正の軍功をねたみ、石田三成に頼んで、清正のことが秀吉にざんげんしました。

三成は秀吉のお気に入りですから、秀吉は之を信じて、清正に帰国を命じました。清正は朝鮮を立つて、伏見へ参りました。当時秀吉は伏見の城に居つたのでございます。

清正は先づ増田長盛をたづねました。此の人だけは自分のために心配してくれるであらうと思つたのでございます。ところが長盛がろくろくあいさつもせず、石田と中直りをしなければ太閤の御きげんは直るまいと申しました。清正は腹を立てて、

「神々も照覧あれ、戦一つ出来ず、人のかけごとばかりいふ石田めとは、此の清正一生中直りは致さぬ。たとひ数年の軍功がみとめられず、此のまゝ切腹を命ぜられても、石田めとは中直りは致さぬ。」

といひきつて帰りました。正直者の清正は人づきあひが下手なので、誰一人清正を秀吉にとりなす者がなく、とうとう太閤のお目通へ出ることを禁ぜられました。

ところが或夜大地震が起つて、人家堂塔一時に倒れ、人々の泣叫ぶ声は天地にひゞきました。此の時清正は、地震と共にはね起き、家来の者二百人に艇を持たせて、一さんに伏見の城へかけつけました。夜はまだ深くございます。

秀吉は城の庭にしき物をのべさせ、幕やびやうぶでまはりをかこはせ、大提灯をとほして、御台所やおそばの女どもと居りました。其所へ清正がかけつけました。まだ誰一人城に登つて居りません。清正は大声で申しました。

「加藤清正これまで参上仕る。上様をはじめ皆様、おしの下になつては居られぬかと存じ、家来ども二百人に艇を持たせてかけつけました。」

秀吉が之を聞いて、

「さてさて、早く参つた。」

と心の中で喜びました。さうして清正のやせた姿、日にやけた顔を見ては、怒がとけて、涙ぐみました。

「お庭先の御門を守る者がございませぬ。某の手で固めませう。」

と清正がいひますと、秀吉はうなづきました。間もなく石田三成が城に登つて参りました。

「石田でござる。お通じなされ。」

「石田と申す者ださうだ。」

「ずるぶんおそく来たものだ。」

「通さないことにしよう。」

などと清正の家来どもが申します。三成は驚いて、

「今天下に此の石田を知らぬ者はあるまい。御門を守る者は誰か。」

「加藤清正の家来でございます。」

「何と申す。清正は上様へお目通がかなはぬはず。」

「何故にお目通がかなひませぬ。」

秀吉が之を聞いて、幕の中から、

「もうよい。通してやれ。」

といひましたので、清正は

「あのせいの低いのが石田だ。通してやれ。」

といつて、三成を入れてやりました。

翌日諸大名が伏見城の大広間へつめました。

秀吉は清正を召出して、

「其の方は無分別者で、大名になつてもまだ仲間げんくわのくせがぬけぬ。小西程の者を堺の町人との、しり、又明国への返事に豊臣清正と記したといふが、それはまことの事か。」

とたづねました。清正はつゝしんで、

「明国の使者、某の陣中に参り、『大明の軍勢四十万、勢はげしくおしよせたるに、日本の大将小西行長は一たまりもなくにげ落ち、もはや朝鮮に日本の武士は一人も居らぬ。生けどつた者は皆かへせ。命ばかりは助けてやらう。』などの広言。御威光にもかゝる所と存じ、『小西は日本の大将ならず、まことは堺の町人、道案内の者故、にげも致したであらう。此の清正こそはまことの大將、四十万の軍勢は此所へ向けよ。切つて切つて切りまくり、其の勢で明の都へおしよせ、四百余州をやきはらはう。』と返事をつかはしましたが、某は四つ五つの頃から親にはなれて、姓も存じませんので、御威光を借りて豊臣と記したのでございます。」

と、べんぜつさはやかに申し開きました。秀吉は感心して、

「それは皆此の方がやりさうな事。清正はつけひもの頃から、此の方のひざの上でそだつたので、何時か見習つたものと見える。もと此の方には近い親類の者、豊臣と名のつたのも差支がない。」

といつて、軍功の賞として、清正に名刀をあたへました。

修身 5巻22課 信義

加藤清正は信義の心の強い人でありました。豊臣秀吉が明国を討つために、兵を朝鮮に出した時、浅野幸長が蔚山の城を守つてゐたところへ、明国の大兵が攻めよせて来ました。其の時、城中の兵が少い上に、敵ははげしく攻めるので、城は日ましにあやふくなりました。そこで、幸長は使を清正のところへやつて救を求めました。清正はそれを聞いて、「自分が本国をたつ時、幸長の父の長政がくれぐれも幸長の事を自分に頼み、自分もまた其の頼を引受けた。今もし幸長のあやふいの見て救はなかつたら、自分は長政に対して面目が立

たない。」と言つて、すぐに部下の者を引きつれて出発しました。清正は手向かつて来る敵を僅かの兵で追散らして、蔚山の城にはいり、幸長と力を合はせ、明国の大兵を引受けてこゝにたてこもり、大そう難儀をしたが、とうとう敵を打破りました。

格言 義ヲ見テ為ザルハ勇ナキナリ。

修身 5巻23課 誠実

清正は嘗て、石田三成等のざんげんで、秀吉の怒を受けて、伏見の屋敷に謹慎してゐたことがありました。ところが、或夜大地震があつて、多くの家が倒れました。清正は秀吉の身の上を気づかつて、部下の者を引きつれてまつ先に城にかけつけ、夜があけるまで、其の門を守つてゐました。秀吉はそのやうすを見て、清正の誠実に感心して、怒もおのづととけました。あくる日、清正を召出して、ざんげんのことを自分できゝたゞましたが、清正に罪のないことが明らかになつたので、却つて前よりも厚く信用するやうになりました。

秀吉がなくなつた後、其の子の秀頼はまだ幼くて大阪城にゐました。其の頃、徳川家康の勢が大そう盛になり、豊臣氏の恩を受けた者も次第に家康について、秀頼をかへりみる者が少くなりました。しかし、清正は相変らず秀頼の為に心を尽し、大阪を通るたびに、きつと秀頼の安否をたづねました。家康はそれをきらつて、そつと人にいひふくめて、やめさせようとしてました。清正は、「大阪を通りながら、秀頼公のごきげんを伺はないのは武士の道でない、又太閤の御恩を忘れてはすまない。」と言つて、聞きませんでした。

或る時、秀頼が家康から京都まで面会に来るやうにと言つて、招かれたことがありました。秀頼の母は家康に敵意のあることを気づかつて、秀頼の京都に行くことに同意しませんでした。けれども清正は、この事で両家の仲が悪くなつてはならないと考へて、「私が命にかけてお護り申しますから、ぜひお出を願ひます」と言つてすすめました。それで秀頼は清正と一しよに京都へ行くことになりました。清正は秀頼が家康と対面する間はもちろん、往復の途中でも少しも側を離れずに、秀頼の身を護つて、無事に大阪に帰りつきました。其の時、清正は、「今日はいさゝか太閤の御恩に報いることが出来た。」と言つて、涙をこぼして喜びました。

国史下巻35課 豊臣秀吉 (つゞき)

秀吉既に国内を平げれば、更に明と交を修めんとし、朝鮮をして其の意を通ぜしむ。然るに明我が求めに応ぜざるにより、秀吉は道を朝鮮にかりて之を伐たんとせしが、朝鮮は明を恐れて従はざりき。

こゝに於て秀吉、朝鮮を定めて明に及ばんとし、関白の職を養子秀次に譲りて太閤と称し、肥前の名古屋におもむきて諸軍を指図せり。紀元二千二百五十二年(文禄元年)小西行長・加藤清正を先手として、十三万余の大軍海を渡りしが、幾千とも知れぬ軍船、いづれも家々の紋つきたる幕うちまはし、思ひ思ひの旗おし立て、威勢のほどいはん方なし。それより諸将釜山に上陸し、道を分ちて北進せしが、戦へば勝ち、攻むれば取り、忽ち京城を陥れ、行長は国王の後を追ひて平壤を取り、清正は東北の地方を定めて二王子をとりこにせり。清正はたゞに武勇にすぐれたるのみならず、よく王子をいたはり又民をあはれみれば、彼の人々も其の徳になつけりといふ。かくて我が軍三箇月にして、殆ど朝鮮全国を従へたり。

朝鮮王大いに恐れて、救いを明に請ひしかば、明の大軍来り助けて、行長を平壤に破り、勢に乗じて京城を取りもどさんとす。我が諸将の中には、京城をすてて退かんとするものありしが、小早川隆景は、「大敵の来るは何よりの幸なり、いざやわが手並を見せん。奮戦してたふるとも、日本に降景ありと知らせんはまた愉快ならずや。」といひて聞きいれず。立花宗茂等と碧蹄館に陣して、六七倍の敵兵をさんざんにうち

破れり。

こゝに於て明は大いに驚き、行長によりて和を求む。秀吉これを許して、出征軍を引上げしめ、明よりは講和の使を送り来れり。時に秀吉は帰りて大阪城にあり、明使をこゝに召せしに、其のもたらせる国書に、秀吉を日本国王となすとありしかば、秀吉無礼を怒りて、明使を追ひ、再び出兵の命を下せり。

慶長二年、清正・行長もとの如く先手となりて、全軍海を渡り、程なく朝鮮の南部を従へたり。年の末に至りて、明の大軍浅野幸長等を蔚山城に囲めり。清正急を聞いておもむき救ひ、城に入る。時に城未だ全く成らず、兵糧も乏しく、清正以下紙を食ひ、馬の血をすするに至るも、なほ屈せざりしが、間もなく我が援兵来るに及び、力を合はせて大いに明軍を破れり。既にして秀吉病にかゝり、慶長三年、六十三歳を以て伏見城に斃ぜり。出征の諸將遺言によりて兵をかへせしに、またまた明軍二十万島津義弘を泗川に攻む。義弘僅かに五六千の兵を以て、奮戦して之を破りしかば、明軍また我が後をうかゞはず、諸將無事に引上ぐることを得たり。かくて前後七年にわたりたる戦争は、こゝに其の終を告げたり。

秀吉は軽き身分より起り、其の智勇を以て国内を平げ、皇室を尊び人民を安んじ、更に外征の軍を起して、国威を海外にかゞやかしたる豪傑なり。されど一方には、又極めてやさしき人なりき。平生母につかへて孝行を尽せしが、肥前の名古屋にありし時、母の病重しと聞かや、急ぎて京都に帰りしに、母既に死せしかば、声をあげて泣悲しみ、其の病床に侍せざりしをなげきたり。又かつて少年の頃仕へたりし松下氏を召出して、多くの領地を与へ、常に優待せり。

朝廷秀吉の大功を思召し、其の社に豊国大明神の号を賜ひ、正一位を授けたまへり。今京都の豊国神社に秀吉をまつれり。

3. 教材の比較

(1) 話題

[教材レベル]

小学校令施行規則や編纂趣意書に明示されているように、当時の国語読本には、修身科・国史科等の他教科の内容が盛り込まれている。国史科は尋常小学校5年と6年に設置されており、当然それ以前の国史教育は、国語科等が担う形になっていた。単に伝記が読めるようにさせるという言語能力の側面だけでなく、その人物についての知識を与え、その人物を通して道徳的心情を養うことが国語科の役割であった。教材もそういう観点で編纂されていたのである。

では、国語科と他の教科で同じ人物が取り上げられた場合、その人物に関する話題—すなわち業績やエピソードなど—はどのように選択されたのであろうか。資料1は③楠木正成、⑦乃木希典、⑨松平信綱の教材文を話題に着目して要約をしたものである（一部引用もあり）。結論からいうと、国語科と修身科では全く異なる話題が取り上げられている。国史科については国語科と重なる部分（⑦）、あるいは修身科と重なる部分がある場合（③）がある。伝記は、その人物の事蹟記録という側面と、その人物の人間性なり生き方なりを伝えようとする伝記文学の側面を持っている。国史教材は事蹟記録の側面が強く、人物主義とは言え、時代背景や他の人物とのかかわりが淡々と語られている。修身科では生き方を伝えようとする伝記文学の側面が強いとみるべきで

あろう。しかし修身科では生き方を直接伝えるというよりも、徳目に関係するかどうかで話題が選ばれており、その徳目に関するその人物のエピソードを羅列したり（⑦「清廉」）、その徳目に関するところを強調したり（③「忠義」）、徳目にかかわらない部分や文脈を省略したり（③「忠孝」）する傾向がある。国語科の教材には事蹟記録的なもの（①⑦⑧など）と伝記文学的なもの（③⑦⑩など）の両方がある。国語科の話題が修身科と全く異なるのは、編纂趣意書の「材料の排列」で「本書ハ小学修身書ニ記載セル事項トノ重複ヲ避ケ又之ニ現ルル人物トノ一致ヲ図リタリ」とされていたためである。つまり、ある人物についての様々な側面が国語科・修身科・国史科の教科書教材を通して学ばれるように作られていた。国語科教材を用いる時も他教科との関連を図る必要があった。

しかし、どういう側面についてどの教科が担当するかという基準は明確ではない。どの教材をどの学年に配当するかということについても、教科における取り決めはなかった。子供がその人物に出会う順序を学年配当別にみると、国語科→修身科→国史科の場合（①⑧⑨⑩）と、修身科→国語科→国史科の場合（②③④⑦）と、国語科と修身科ではほぼ同時で後に国史科に出てくる場合（⑤⑥⑩）の3通りがある。国史教科書は5・6年でのみ用いられるので最後になる。国語科が他教科に対してどのような位置付けになっているのかは、ここからみることはできない。教科の役割と教材の性質との関係はあいまいで、教科の役割ではなく教材の内容の難易度と精神的発達段階の関係で、どの教材をどの学年に配当するかということが決められていたようである。例えば③楠木正成の国語科「千早城」は3年の教材であるが、千早城を守った正成の機転が浮き彫りになっているもので、後醍醐天皇に対する忠義については触れられていない。児童は正成の頭の良さに単純に感心しながら読んでいくことになるであろう。修身科「忠義」「忠孝」は5年の教材であり、単に機転がきくだけではなく忠義の心を持つ尊敬すべき対象としての正成を見ることになる。そして国史科「楠木正成」で日本歴史上の位置づけを学ぶことになる。また資料には要約を示していないが、⑩本居宣長の修身科「せいとん」（3年）は、暗い所でも本が取り出せるようにしてあった宣長のエピソードから整頓の大切さを説いている教材である。国語科「松坂の一夜」（5年）は古事記研究への原動力となった賀茂真淵との出会いの一夜を描いたもので、国学的精神を理解する必要がある教材であり、5年生以上でなければ理解できないであろう。学年が進むに連れて、その人物の様々な側面について少しずつ精神的に深いことを学ばせようとしていることが分かる。

[教材観レベル]

前述のように、3教科の教材を通してその人物の事蹟を知識として与えその人物を見習って道徳的心情を養うように教科書は編纂されていた。国語科の授業で国定国語読本の教材を教えるにしても、他教科の教育内容との関連を図る必要があった。

しかし、具体的にどのようにして関連を図るのかという問題については、教科書編纂のレベル（教材レベル）では明確な記述がなく、実践の段階での教師の判断（教材観レベル）に任されていたといえよう。当時の国語教育・修身教育・国史教育の雑誌の指導案等を見ると、「連絡」という

表現で、以前に学んだ他教科の内容を思い起こさせたり、今後学ぶ予定の事柄を念頭においた指導を試みたりする様子が窺える。けれども、国史教科書に登場しない人物をも取り扱ってみたり、連絡すべき事柄が違っていたり、連絡に触れていないものがあったりして、雑誌の書き手、つまり実践者である教師によって「連絡」の仕方は異なっている⁹⁾。それぞれの教師の教材観や教材研究に委ねられていたのである。

(2) 叙述, 文体

[教材のレベル]

それぞれの教科は、その教科特有の叙述の仕方をとっている。先にも述べたが、修身の教材文は徳目に関する事柄が羅列され、強調され、それ以外のところは省略される事がある。資料2に示した加藤清正の修身5巻23課「誠実」は3つの段落からなっているが、「誠実」を表しているという以外にはつながりがない。また題目も「忠義」「忠孝」「清廉」「シヤウヂキ」「信義」など徳目であり、結び方も「忠臣ハ孝行ノ門ニ出ヅ。」「シヤウヂキ ハ イツシヤウ ノ タカラ」「義ヲ見テ為ザルハ勇ナキナリ。」など徳目に関する格言が示されているものがある(資料1・2参照)。その人物の生き方や業績を伝える文章というよりは、徳目の具体例としてその人物の行動の結果が示されているという感がある。これに対し国史科の教材文は、1つの教材文の中に複数の人物が登場し、その行動が淡々と平板に描かれている。

国語科の教材文は、その人物が何を感じ、考えてその行動を起こしたかという行動の過程や内面に踏み込んだ文章となっている。資料2の修身5巻23課「誠実」の第1段落は、国語7巻23課「加藤清正」と重なっている。この2つの表現を比べてみたい。国語科の教材文では、清正が腹を立てて「石田めとは、此の清正一生中直りは致さぬ」と言う場面や、門番で「あのせいの低いのが石田だ。」などと言う場面があり、一本気で子供っぽい清正の人柄を偲ばせるような文学的叙述となっている。修身科では人柄が滲んでくるような叙述はない。あつたとしても必ず徳目についてであり、「信義の心の強い人」「清正の誠実」のように直接的な表現を用いているので、国語科の文章とは明らかに異なっている。

また、国語科独自の表現形式として韻文がある。本稿で取り扱っている人物教材の中では⑦乃木希典の「水師營の会見」、⑧広瀬中佐の「広瀬中佐」がそれに当たる。

[教材観レベル]

菊池¹⁰⁾は、国語科も修身科も国史科も「国民精神の涵養」という共通の目的を持っているが、中でも国語科は「具体的事実の文学的叙述の文章を教材として、之をば鑑賞し、味読する態度を取る所に、他の二科の及び難い、深い印象と、強い感激を期待する事が出来る」としている。「文学的叙述」とは[教材レベル]で示したように、人柄や内面を表す表現や韻文などの文学形式をとっているということである。

「文学的叙述の文章を」「鑑賞し、味読する」とはどういうことか。文章構成の扱い方にその特徴が現れている。資料2の②加藤清正で見てみよう。『修身研究』¹¹⁾によれば修身5巻23課「誠実」は3段落構成になっているとした後、「これらの史実を通じて一貫して流る、清正の誠実を汲ん

で、信念をあくまで遂行するところに基準を据えて、清正の人格を見、誠実の発現を具体化する」ことがこの教材の指導目的とされている。3段落構成が文章を「鑑賞し、味読する」ために用いられるわけではない。一方、雑誌『国語教育』第11巻9号の「教授の実際」では次のように書かれている⁹⁰。「この話は……吾々は、修身の教材としても、幾度びか取り扱っているので、今更事新しく研究するまでもない。国語教材としてこれを見るならば、叙説の仕方、即ち構想に注意を払う必要がある。外にあらわれた文段に関せず、内面的なる想よりみるならば、……の六節から成ると考えることができる。」「右の中で、この文の中心となる所は、第四、第五節のところであつて、構想を山がたの線に依って示すならば、こゝが山の最も高い所になるのである。」このような文章構成の把握が、指導内容や時間配当等を決定している。指導目的は、「清正、……秀吉の如き諸人物相互の関係から、人生の一面を觀照し、特に加藤清正の面影を忍び、至誠の貴いことを味得させることが、この話の持つ内面的意味であるが、この課の取扱いに於いては、話の筋（構想）の理解に力を用いたい」としている。「人生の一面を觀照」すること、「特に加藤清正の面影を偲」ぶこと、「至誠の貴いことを味得させること」を「話の筋（構想）の理解」の扱いと結び付けて教えようとしていることが分かる。「人生の一面」「面影」という人物像そのものの「觀照」を「話の筋」との関係から扱おうとするのが、国語科の独自性である。

また、韻文という形も「文学的叙述」として「鑑賞し、味読する」ことに、有効に機能している。もしも、その人物の業績を正確に教えるのが目的であれば、韻文は適切な形ではない。単に知識として、軍神広瀬を知らしめるだけであれば、情報量の多い散文の方が便利なはずである。しかし、雑誌『国語教育』の中では、「広瀬中佐」（8巻28課）は「大觀、僅か三連に広瀬中佐としての姿を髣髴させた詩である。七七調のもつ莊重でしかも力ある詩形と、この内容が融合渾一してある所にこの詩の生命が」⁹¹あるとされている。唐沢⁹²は⑦乃木希典の「水師營の会見」（9巻10課）は、韻文であるが故に「この歌はそのまま唱歌として教えられ、歌われて来たので、児童に対する影響は頗る大きいものがあつた。そしてこの歌をうたいながら、難攻不落の旅順を破り、しかも伝統的武士道を以て敵将を遇して、日本の『国威』を世界に輝かした英雄としての乃木大将の姿が、児童の頭に焼きつけられているのである。」と指摘している。国語科教材はこの文体を生かして、より「深い印象」「強い感激」を与えることを目的としたのである。

4. おわりに

次の2点が確かめられた。

- 1) 国定第三期の国語読本は修身科・国史科としての内容を含んでおり、読みを教えると同時に修身的なものの考え方歴史的な知識を教えることが要求されていた。3教科を通して子供の発達段階に応じて、その人物のいろいろな側面を教えようという意図が窺える。しかし、具体的にどの教科とどのような関連を図っていくのかは、教師の教材観に任されていた。
- 2) それぞれの教科の教材文にはその教科特有の叙述の仕方があり、その叙述の仕方が教科の性質を支えている。国語科の教材文は、人物の人柄が忍ばれるような発言や、人物の内面に踏み

込んだ文学的な表現や、韻文などの文体にその特徴がある。国語科の独自の役割は、この国語科特有の表現や文章構成を丹念に読み味わい、文体を生かして、他の教科にもまして「深い印象」「強い感激」を効果的に与えることである。

本稿では、人物教材に関する話題と教材文の叙述、文体の2点によって、国語科の教材観を表そうとした。しかし、更に人物教材に限らず他の視点で教科間の比較をすれば、当時の国語科の独自性が一層明確になると考えている。

注

- (1) 吉田裕久は、国語教科書史研究の体系について、①共時的研究——教科書の記述的研究、体系的な研究、②通時的研究——他教科書（同時代・異時代）との比較的研究、③高次共時的研究——現行教科書の統合的研究の3つのレベルを示している。（吉田裕久「国語教科書史研究の課題—その領域と方法—」全国大学国語教育学会『国語科教育』第42集 1995. 3 p. 14）しかし、②の比較的研究において、他教科の教科書との比較を試みた先行研究は少ない。
- (2) 唐沢富太郎は第一期から第五期までの国語科と修身科の国定教科書に現れた人物を整理している。（唐沢富太郎『教科書の歴史』創文社 1956）本稿では、巻末につけられた一覧表をもとに、第三期に国語科でも修身科でも登場する人物を拾い、国史科で該等する部分を探した。
- (3) 例えば、②加藤清正（資料2参照）の場合を見てみよう。『修身研究』4巻1号の「小学修身書教案」では、巻5第22課「信義」及び23課「誠実」で、「国語読本巻七、第二十三と適当に連絡をつけたい」（p. 81）としている。また同号の「小学修身書の研究」では「次に此の課を生かして取扱ふために清正の背景として挙げられた人物及び周囲の状態に就いては特に道徳的価値を高むべき見地から、彼の信仰と共に教授者の注意すべき事項である。」（p. 68）と言う。一方『国語教育』11巻9号では「この話は誠忠なる加藤清正の面影を髣髴させ、興味多きものとして、ひろく知られているもの、吾々は修身の教材としても、幾度びか取り扱っているので、今更事新しく研究するまでもない。」（p. 64）「清正、行長、三成、長盛、秀吉の如き諸人物相互の関係から、人生の一面を觀照し、特に加藤清正の面影を忍び、至誠の貴いことを味得させることが、この話のもつ内面的意味である。」（p. 65）「なお此の課を取扱うには豊臣秀吉の朝鮮征伐の概略をどこでか話して置き、その当時、行長、清正、三成、長盛等がおかれたシチュエーションを明白にしなければならない。」（p. 66）という受け取り方をしている。また、⑨松平信綱は国史教科書中には出てこないにもかかわらず、『最新史観国史教育』2巻3号においては、「徳川三百年の基礎を固めた三代將軍家光公に仕へ、よくその補佐の役を勤め幕府を磐石の安きに置いた信綱の幼時は国語読本巻八にも出てゐる。／徳川家光のところで当然信綱のことは副人物として取扱はれることであらう。」（p. 75）と書かれており、教師の采配によって扱われうることを示している。
- (4) 菊地讓「読方教育目的論(二)」『教育・国語教育』昭和6年7月号 p. 114

- (5) 『修身研究』 4 卷 1 号 pp. 80-81.
- (6) 竹内文路「読方教授例」『国語教育』 11 卷 9 号 大正15年 9 月 pp. 64-66.
- (7) 秋保光吉「読方指導案」『国語教育』 20 卷 3 号 昭和10年 3 月 pp. 84-86.
- (8) 唐沢富太郎『教科書の歴史』 創文社 1956 p. 705